

序論:「私は知っている」という確信

- 知識は私たちに自信と安心を与える
- パウロの時代、「グノーシス(知識)」を重視する思想が広がっていた
- コリント教会も「知識」を重視する風潮の影響を受けていた
- 彼らは正しい知識を持っていた:「偶像は存在しない」「真の神は唯一」
- しかしパウロは「知るべきほどのことをまだ知らない」と警告する

問い:

- 真の知識とは何か?
- 知識を持つことと信仰に生きることはどう関係するのか?

1. 知識は高ぶらせる、愛は人を育てる(1-3 節)

コリント教会の背景

- 商業都市コリントでは偶像の神殿が生活と密接に関わっていた
- 市場の肉のほとんどが偶像に献げられたもの
- 職業組合の会議も神殿で開催されていた
- 「偶像は存在しないから気にする必要はない」と考える人々がいた

パウロの警告(1-2 節)

「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。自分は何かを知っていると思う人がいたら、その人は、知るべきほどのことをまだ知らないのです。」

- 知識を自分のためだけに用いるなら、それは自分を増長させるだけ
- 本当に大切なのは、**愛によって人を育てること**(建て上げること)
- 知識より愛の実践という優先順位を知らない人は「まだ無知」

神に知られるということ(3 節)

「だれかが神を愛するなら、その人は神に知られています。」

- 神に知られている(愛されている)から、神を愛することができる
- 神に知られる = 神に愛される

信仰の流れ:

神様に知られる(愛される)

↓

神様を愛せるようになる

↓

愛によって人を育てる

↓

正しい知識を得る

原則: すべての始まりは神様に愛されることであって、知識ではない

2. 唯一の神とキリストと私たち(4-6 節)

偶像の実態(4-5 節)

- 偶像の神は実際には存在しない

- 唯一の神以外には神は存在しない
- ただし、偶像の背後には悪霊の働きがある(10 章 20 節)

唯一の神との関係(6 節)

「私たちに、父なる唯一の神がおられるだけで、この神からすべてのものは発し、この神に私たちは至るからです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、この主によってすべてのものは存在し、この主によって私たちも存在するからです。」

父なる神:

- すべてのものの起源
- 私たちの目的(私たちは神に至る)

主イエス・キリスト:

- すべてのものはこの主によって存在する
- 私たちもこの主によって存在する

重要: 父なる神と主なるキリストは同格の存在(三位一体)

自己吟味の問い

- 自分のルーツと存在と目的を神に置いているか?
- 先祖や民族をルーツに据えていないか?
- 仕事・お金・人間関係を存在(アイデンティティ)にしていないか?
- 自己実現・この世の楽しみ・成功を人生の目的にしていないか?

警告: 神の座を奪っているものこそ、あなたにとっての偶像

結論:神に知られて生きる

三つの真理

第一: 知識よりも愛が優先される

- 正しい知識も自己正当化に用いるだけでは人を高ぶらせるだけ
- 真の知識は愛によって兄弟姉妹を支え、教会を建て上げることへと導く

第二: すべての始まりは神様に愛されること

- 神様に知られ、愛されているから、私たちは神を愛し、人を愛することができる
- 知識は愛の実践の結果として正しく得られる

第三: 父なる神と主イエス・キリストが私たちの存在のすべて

- 神様は私たちのルーツであり、目的
- キリストによって私たちは生かされている

適用と招き

- 何を自分の人生の土台としているか?
- 先祖・民族・仕事・成功・お金・人間関係を神の座に置いていないか?
- それらこそが私たちにとっての偶像

招き:

- 真の自由は、唯一の神にすべてを明け渡し、キリストによって生かされることの中にある
- 知識を誇るのではなく、愛によって互いに仕え合い、教会を建て上げる者となろう
- ルーツも、存在も、目的も、すべてを神様に置く信仰に生きる者として歩もう